



大串孝二は私にとって謎の存在であった。パフォーマンスを行っているのだが、墨絵も描いている。及川廣信の舞台美術を担当する側面も持つ。私は10年程か、これら大串の活動を見ていて、この人は何か特殊なものを携えているにも関わらず近年個展を開催しない、真木田村画廊で個展を行っていたにも関わらず当時から今日に至るまで活動しているアーティストと付き合いがないので、展覧会を企画した。今回はパフォーマンスなしとお願いした。大串の絵画の力を強調したかった為だ。トークも二本用意した。初日、大串のこれまでの活動を紹介する「こちらとあちら」を大串と私で行った。1975年に東京芸術大学を卒業。卒業制作が油彩科にも関わらず立体を提出し認められたこと、翌年インドに渡り石を見たりタブラを演奏したりした際に「はね」の形態と意味を制作に応用したこと、1979年にラスコー洞窟壁画がそれを描いた人間の脳の投影図であることを発見し制作に取り込んだこと、この傾向で今

日までパフォーマンスを含めて活動していることなど、驚きの告白の連続であり、聞いている者には刺激的であった。最終日には批評の平井亮一さんに「時代の推移と相違 山岸信郎を中心に」と題して講演を行って戴いた。平井さんは過去を振り返りながらもその過去がどのように現在に繋がっているのかをじっくりお話しした。山岸さんへの思い、自らの活動、アーティストへの期待など、熱の籠もった講演はこれこそパフォーマンスであり、私は言葉に出来ない想いに深く胸を打たれた。批評、ギャラリスト、アーティストは分業しているのではなく、それぞれが、それぞれの役割以上を果たさなければならないのだ。大串は画廊内三面に大小27枚の作品を組み合わせ、一面のみ額装の小品5点によるインスタレーションを行った。大串の胎内、若しくは脳髄に引き込まれていく感覚だ。事務所には加藤英弘撮影のパフォーマンスの写真22点を飾った。ここから垣間見られる姿が、大串そのものである。

